

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04371

研究課題名(和文)「生涯現役」社会構築に及ぼす中高年期の「越境的交流」の効果

研究課題名(英文) The processes and condition for continuing to work at a particular enterprise for life

研究代表者

田島 信元 (TAJIMA, Nobumoto)

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号：90002295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、越境的交流という自他相互の発達支援ツールが高齢期における健全な「生涯現役」活動に影響を及ぼすという視点のもと、まず、生涯現役を目指す職場における人材養成システムのあり方とその支援法について検討した。特に、若年層年代、中年層年代、高齢層年代の従事者との相互交流のあり方や役割分担において、垂直的越境交流を通じた共同体的システムが形成されており、越境的交流支援の重要性が示唆された。また、職業生活を目前とする大学生においても、日常的な共同生活が求められる学生寮で暮らすことを通じて、越境的交流を通じた共同体的システムを獲得していくことが示され、生涯発達の観点から支援の重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、企業を中心として声高に叫ばれ始めている「生涯現役」という思想の展開について、多くの高齢者が健全な「生涯現役」活動に従事できる条件を検討し、生涯現役を目指してきた特定の企業を対象とする事例研究であったが、「企業内の若年・中年・高齢層の三世代間の越境的交流による共同体システムの構築」という、どの企業にも適用できうるモデルが抽出された。さらに、日常的な共同生活を通して人格形成を育むことを目指してきた大学寮生に対する事例研究からも、4年という短期間でも同様の現象が抽出され、越境的交流に基づく共同体システムの構築という「生涯現役」社会構築の条件は、今後、生涯発達支援の中核となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to clarify the processes and conditions for continuing to work at a particular enterprise actively for life time with Mayekawa as a case. Firstly, we conducted an interview survey on how young, middle-aged and elderly workers fuse together and work. As a result, each generation was devised to have positive involvement after understanding the characteristics of other generations, conceptualized as "cross-boundary interaction". Those results and implications were verified through second study by AMOS, shown as the Mayekawa model. Finally, above implications were found even in the university undergraduate students who live in the dormitory requiring them to live together in daily life. They can acquire the collaborative activities through the cross-boundary interaction among different 4 graders. It suggests that the collaborative work among generations with synchronization are the life-long phenomena found in all developmental stages from infancy to old age.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：生涯現役社会 越境的交流 垂直的越境 水平的越境 共同体システム 職業アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、「生涯現役」という概念が世間に広まりつつある。これは、高齢化が進む社会において、高齢者の働き方改革という観点から、企業における技術の伝承のあり方といった産業界や政界などの要請という側面もあるが、発達心理学においても、高齢者に限らず、全発達段階を対象とした生涯発達支援の観点から「生涯現役」社会構築の条件を明らかにしていく必要があると考える。

(2) 生涯発達心理学の基礎理論の一つであるヴィゴツキー(2001)の文化的発達理論によれば、個人の生涯にわたる高次精神機能の発達は、個人と他者(年長者)との社会的相互作用を通じた文化獲得によるとされる。とりわけ個人の達成領域と他者の達成領域の境界を相互に越境し合う「越境的交流」による相互の異文化取得・統合過程を通じた“共創的”な文化獲得のあり方に依存して生起するとされる。

その意味で、高齢者が健全な「生涯現役」活動に従事するという事は、成人期以降に限定して考えても、成人期 中年期 高年期と生涯発達を健全に達成し続けてきているということであろう。そして、このことを可能にする条件とは、“成人期～高年期間において、それぞれの発達段階に属する人々の特性を基盤とした上で、それぞれにとっての発達課題である成人、中年、高年期の三世代(三発達段階)間の相互の緊密な越境的交流(「垂直的交流」)を通しての、それぞれの段階の文化(特性)の発展的、創造的共有が成立することである”と考えられる。一方、上記の「垂直的越境交流」に対して、「水平的越境交流」ともいべき同一発達段階での仲間間交流が個人の発達に及ぼす効果が論じられている。とりわけ、成人期、中年期、高年期それぞれの発達課題の解決に資する「家庭-地域-職場」といった異なるマイクロシステム(Bronfenbrenner, 1996)間の「水平的越境交流」のあり方が重要になろう。

(3) 生涯現役社会構築の課題は、必ずしも成人期以降の、また、企業内の問題だけではなく、生涯発達の観点から、生涯をかけて形成していくべき共同体的なシステム構築の課題であると考えられる。さらに近年、越境的交流を進めていく上で、幼少期においても共同的な学習を支える非認知能力(学習に向う力)の形成の重要性がクローズアップされている。個人が他者(社会)とどう共同体的システムを構築するかという点で、生涯発達の過程を通して、個人システムと他者(社会)システム間の越境体験とその発達をどう支援していくかに関心が集まっており、発達の越境的交流支援のあり方の解明が期待されている。

2. 研究の目的

そこで本研究は、越境的交流という自他相互の発達支援ツールが高齢期における健全な「生涯現役」活動に影響を及ぼすという視点のもと3つの研究を実施した。まず、**研究1**、**研究2**では、それぞれ、質的な面接調査、および量的な質問紙調査を通して、職場における人材養成システムのあり方とその支援法について、特に、若年層年代、中年層年代、高齢層年代の従事者との相互交流のあり方や役割分担の観点から、どのような垂直的越境交流が生起しているかを明らかにする。同時に、若年期、中年期、高齢期の各発達段階において職場内、および職場と家庭、地域活動との調整・統合という水平的越境交流のあり方について明らかにする。**研究3**では、職

業生活を目前とする大学生が、日常的な共同生活が求められる学生寮で暮らすことを通してどのように越境的交流を通して共同体的システムを獲得していくのか、その過程を検討することで、職業生活に向けた共同体的システムの形成の準備性のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) **研究1**：高齢者雇用を創業時から行っている株式会社前川製作所を事例とし、研究1では、前川製作所守谷工場で働く男子社員19名を対象に、若年層(6名)・中年層(8名)・高齢層(5名)がどのように融合して仕事をしているのかについて半構造化面接調査を行った。

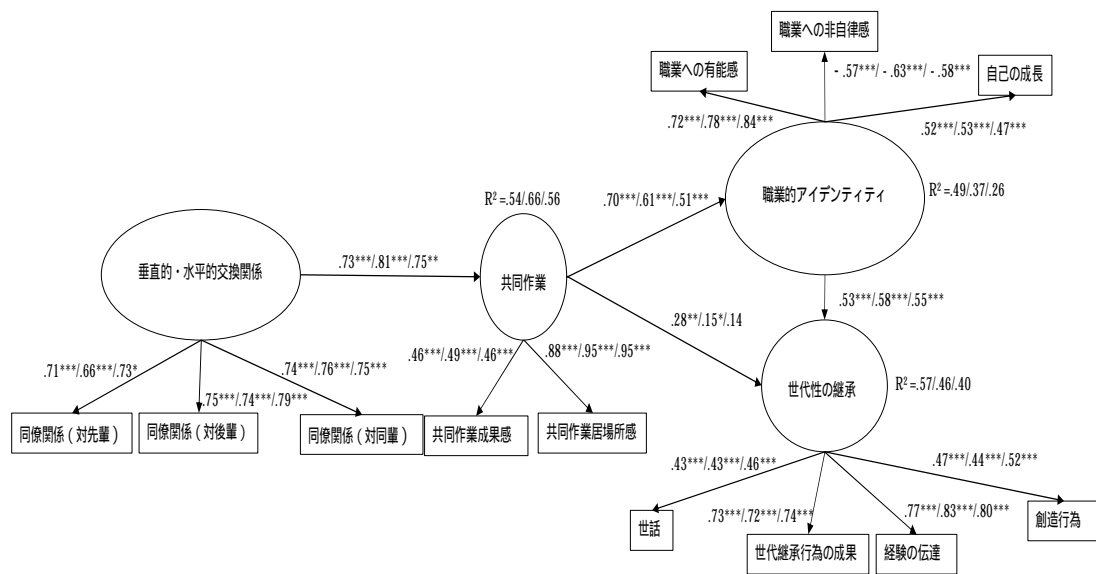
(2) **研究2**：研究1の分析結果をもとに、前川の全社員にウェブ調査を実施。男性902名、女性117名の計1019名からの回答が得られた。今回は男性社員に焦点化し、10代から30代を若年層(343名)、40代を中年層(436名)、50代以上を高齢層(123名)とした。調査に使用した尺度は、垂直的・水平的交換関係(金井, 2000を加筆・修正) 協働作業認識尺度(長濱・安永・関田・甲原, 2009を加筆・修正) 職業的アイデンティティ(児玉・深田, 2005を加筆・修正) 世代性の継承(丸島・有光, 2007を加筆・修正) 個人的背景(年齢, 学歴, 結婚の有無, 1週間の勤務日数, 1日の平均勤務時間, 入社形態(新卒・中途))であった。

(3) **研究3**：調査対象は、60余年の伝統をもつ民間の学生寮で生活する都内の複数の大学所属の1-4年次の男子学生181名であった。対象者の中から各学年からランダムに選択した26名の学生に対する半構造化面接調査をもとに、下記の4つの側面の質問紙調査項目を作成し、全寮生に対して実施した。4つの調査内容は、現在の寮生活における日常的、行事的共同生活活動の実態と意識、大学と寮生活のバランスのとり方、共同生活に関わる友人関係のあり方、および非認知能力(社会的対処能力・コミュニケーション能力・自己開示能力・自己統制能力)の各指標における発達状況、10-15年後の企業における共同体形成活動の諸指標(共同的作業力・世代育成力・労働意欲・役割意識)について、現在の体験とのつながりの予測、青年前期(中・高校生期)における親子関係、友人関係、教師・生徒関係のあり方、であった。

4. 研究成果

研究1では、前川製作所守谷工場で働く社員を対象に、若年層・中年層・高齢層がどのように融合して仕事をしているのかについてインタビュー調査を行った。その結果、各世代が他の二世代之特徴を理解した上で積極的な関わりを持てるような工夫がされており、若年層は中年層と高齢層との関わりの中で、仕事における新たな知識や技術を獲得していた。中年層は若年層と高齢層の立場や職務環境を理解した上で、仕事の方向性を決めるなどの役割を果たしていた。高齢層は若年層や中年層への育成とともに、組織や企業文化への次世代への発展についての発言も見られた。

また**研究2**では、AMOSによる多母集団同時分析を行った結果、企業内における「生涯現役」社会構築の過程と条件に関するマエカワ・モデルが示された。マエカワにおいては、世代間の関係性である垂直的交換関係や、同期との関係性である水平的交換関係によって、仕事における共同作業が活発に行なわれるようになり、そこから個々人の職業的アイデンティティの確立や次世代への興味・関心へとつながっていくことが示唆された。



注) 若年層/中年層/高齢層の順で標準偏回係数および決定係数を示した。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure マエカワ・モデル検証の結果

研究3では、大学時代の共同体意識形成に影響を及ぼすことが示唆される、寮における日常的、かつ行事的な共同生活のあり方、とりわけ、班活動という小集団活動における学年間交流と寮間交流を通じた垂直的・水平的越境交流のあり方が、大学時代の共同体意識形成に寄与することが示唆された。また、共同体意識の形成の高さは、学年差を伴う友人関係の質の高さ、非認知能力の高さ、将来の予測的な職業的共同体意識・行動に対する積極的態度的高さに関連していた。さらに、中・高生時代の友人関係におけるリーダー的経験や中・高等学校生活満足度が大学時代の共同体意識形成と強く関連することが示唆された。

これらの諸結果は、研究1、研究2で見られた20~70歳台にいたる企業の中で見られた若年層・中年層・高齢層の3つの世代間交流に基づく共同体形成の過程に対応したものが現れていると考えられる。すなわち、大学1,2年生は、企業文化を、異文化接触・克服の過程として新しい視点を摂取していく若年層における活動と同質的なものが見られる。一方、3年生の活動は、若年層がローカルな就労文脈で身に付けた異文化接触・克服の産物を、複数の就労文脈との交流などの諸経験によりローカルな視点の転換を通じた、より一般化した形で提示していく中年層と同質的な活動ととらえられる。そして4年生は、若年層に対し個別に支援し、中年層には一般化を支持しつつ、そこからこぼれた要因について支援していくという、複数視点の統合に意義を見出す高齢層の活動と同質的なものと考えられる。就労者はプロジェクトチーム(小集団)活動における3世代間の越境的交流を通して、全体として共同体を形成していると考えられるが、大学生も4年間の共同生活における、主として班(小集団)活動を通じた学年間交流を通して、短期の共同体形成の過程を経験していることが示唆されるのである。その意味で、大学時代の日常的、行事的な共同生活は、就労者が迎える実際の共同体形成への準備性をもったものと考えられ

よう。

さらに、今回の大学生に見られた共同体意識形成過程に、中・高生時代の家庭、とくに学校生活の要因が関わっていることが示唆されたことは、生涯現役社会構築の条件としての越境的交流の効果が、単に、生涯現役を目指す企業における高齢層と中年、若年層との三世代交流に見られるだけでなく、特定の支援条件によっては、大学生、中高生世代においてもみられることが示唆されたわけで、まさに、越境的交流支援を通した乳幼児期からの生涯発達支援の効用の可能性を展望することができよう。今後の課題として、早急な検証が期待される。

<引用文献>

- ブロンフェンブレナー,U.(磯貝芳郎・福富護訳)。(1996)。人間発達の生態学。東京：川島書店
- 金井篤子。(2000)。キャリア・ストレスに関する研究。東京：風間書房。
- 児玉真樹子・深田博己。(2005)。企業就業者用職業的アイデンティティ尺度の作成。産業ストレス研究，12, 145-155.
- 丸島令子・有光興記。(2007)。世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性，妥当性の検討。心理学研究，78(3), 303-309.
- 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房。(2009)。協同作業認識尺度の開発。教育心理学研究，57, 24-37.
- ヴィゴツキー,L.S.(柴田義松訳)。(2001)。思考と言語。東京：新読書社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高橋彩・田島信元・原健之・伊東一郎・手島俊夫	4. 巻 9
2. 論文標題 企業内における「生涯現役」社会構築の過程と条件の分析：企業内三世代の越境的交流の効用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生涯発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 89 - 108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋彩・田島信元・原健之	4. 巻 32
2. 論文標題 企業における中年期社員と高齢期社員の職業的アイデンティティに関する探索的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 産業・組織心理学研究	6. 最初と最後の頁 167-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋彩	4. 巻 9
2. 論文標題 企業就業者のジェネラティビティ発達要因に関する探索的検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生涯発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 43 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋彩
2. 発表標題 企業における生涯現役社会構築に関する研究
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北村勝朗
2. 発表標題 熟達体験から捉える生涯現役社会の構築
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蘭牟田洋美
2. 発表標題 仕事での遊び・フロー体験・居場所感と生涯現役との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島信元
2. 発表標題 生涯現役社会構築の生涯発達の条件としての発達の越境活動の貢献
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前川正雄
2. 発表標題 学生寮における共同生活を通じた生涯現役能力の形成過程
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原健之
2. 発表標題 ワーク・ファミリー・エンリッチメントの観点からみた大学生の準備性
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋彩
2. 発表標題 企業就業者のジェネラティビティ発達と大学生の準備性
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮下 孝広 (MIYASHITA Takhiro) (00190778)	白百合女子大学・人間総合学部・教授 (32627)	
研究 分担者	鈴木 忠 (SUZUKI Tadashi) (40235966)	白百合女子大学・人間総合学部・教授 (32627)	
研究 協力者	高橋 彩 (TAKAHASHI Aya)	(公財)前川ヒトづくり財団・研究員	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	原 健之 (HARA Takeyuki)	白百合女子大学大学院・文学研究科・博士後期課程院生	
研究協力者	前川 正雄 (MAEKAWA Masao)	(公財)和敬塾・理事会・理事長	
研究協力者	伊東 一郎 (ITOHI Ichiro)	(公財)前川ヒトづくり財団・理事会・理事長	